

あおさぎのいど



むかしむかし、善通寺のよしわらの里は、山すそに田んぼが広がるさびしい村でした。村の中ほどには、「せいりゆうさん」とよばれているじん社がありました。その近くはぬまになっていて、一めんにあしと
いうせの高い草が生えていました。

ある日のことです。山のむこうから、一羽の青いさががとんできま
した。さがは、ぬまのあたりまで来ると、ど
うしたのか羽をくるしそうにうごかし
ながら、よろよると下りていきました。田ん
ぼのしごとをしていた村人たちが、ふしぎに思
って行ってみると、あしのかげでさがほど
見たさがが、くるしそうにもがいていました。
さぎの羽は、おれたようにまがり、おなかのあ
たりは、まっ赤なちで、そまっていた。

「これはひどいけがじゃ。」





「いたいだろうに。かわいいそうに。」

村人たちは、さぎを あしのはっぱをしいた上に
ねかせました。そして、きず口をきれいにあらひ、
「けがが 早く なおりますように。」
と、羽を やさしく なでてやりました。

つぎの日も、村人たちは さぎのようすを見に
来て、きず口をつめたい水でひやしたり、頭や羽
を やさしく なでたりしてやりました。えさを
もってきて さぎのそばにおいて、そつと帰る村
人もいました。三日たつと、さぎは、少し羽をう
ごかせるようになりました。五日もたつと、え
さをたくさん食べて すっかり 元気になる、も
うあしのはっぱの 高さまで とび上がれるよう
になりました。

七日七夜たった ある日のことです。一羽のさぎが、
なごりおしそうに 村の上を ゆっくり ゆっくり
回って、やがて村のむこうへ とんで行きました。

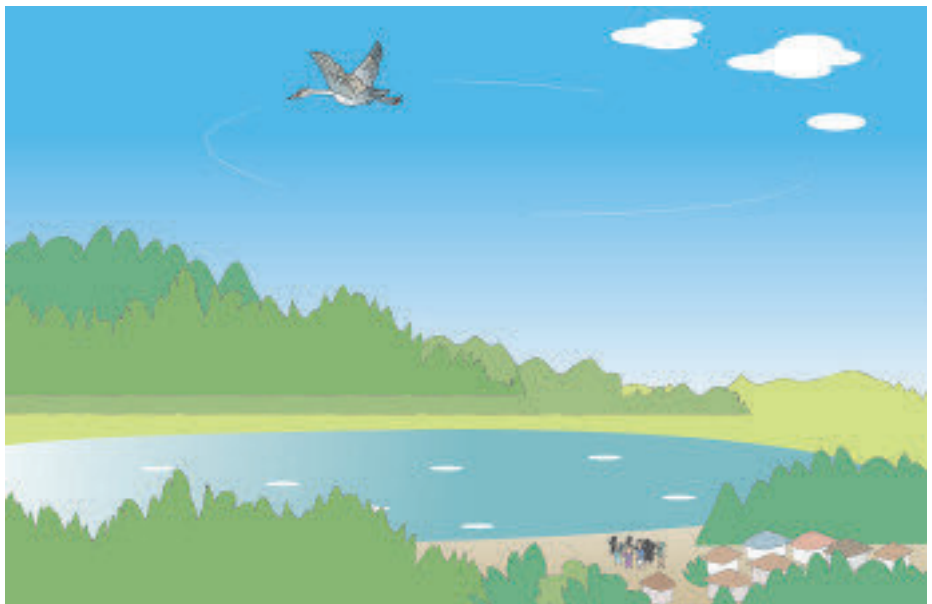
「ああ。あのさぎではないか。」

村人たちは、あしのぬまに かけつけました。やはり
あのさぎのすがたは、どこにも見えません。そ
して、ふしぎなことに、そこには いつの間にか い
ずみができており、水がこんこんと わき出ているの
です。

「ああ、なんてきれいな水だろう。」

「それに、こんなに たくさんのお水が わき出るなん
て。」

よしわらでは、水が足りなくて たいへんこまってい
ましたから、みんな大よろこびです。村人たちは、い
ずみの水を みんなで 大切に大切に つかいました。



ある日のことです。目のびよう気でこまっていた人が、このきれいな水で目をあらいました。するとふしぎなことに もとどおり すっかり よくなったのです。このうわさは となり村にも そのまたとなり村にも 広がり、目のびよう気でこまっている人が、たくさんやって来ました。きれいな水で目をあらった人たちは、びよう気がなおり、よろこんで 帰って行きました。よしわらの人たちは、このいずみを「あおさぎのいど」とよんで、いつまでも 大切にしたいということです。

